

## 令和2年度「不登校に関する研修会」(第2回) 講義記録

- 1 日 時 令和2年8月11日(火) 10:15~12:00
- 2 場 所 県立総合体育館
- 3 講 師 元兵庫教育大学大学院 池島 徳大特任教授
- 4 テーマ これからの不登校支援のあり方  
—全ての子どもを支えるソーシャルボンドについて考える—
- 5 内 容

### (1) 不登校の対応のポイント

- ・不登校の対応のポイントは5つある。  
ポイント①: 不登校問題は進路(生き方)問題である。  
ポイント②: 子どもの持っているリソースを活用し、リレーションづくりを中心として、予防的・開発的生徒指導を進める。  
ポイント③: 子ども、保護者の願いや戸惑いを受け止め、がんばりを支える。  
ポイント④: 不登校になることは悪ではない。  
ポイント⑤: Trial & Error

### (2) 不登校支援の留意点

- ・不登校の支援には教育課程の中で特別活動が大きな意味を持っている。
- ・刺激反応関係に基づく応用行動分析による環境調整を行い、得意なことを伸ばすと問題行動は少なくなっている。
- ・不登校の問題は学校に来ていないということだが、子どもの心の中身は見えにくい。登校の子どもは困った子ではなく、困っている子と考えて関わること。
- ・不登校の子は心に包帯をしているととらえて対応すること。不登校の子どもの登校のきっかけになるアンカーポイント(関わりの接点、得意なことなど)を見つける。

### (3) 不登校の子どもの回復の過程とその対応の基本

<不登校の子どもの回復の8つの段階>

I 身体的愁訴の段階    II 不登校の合理化の段階    III 不安・動揺の段階  
IV 絶縁・閉じこもりの段階    V あきらめ・自己受容の段階    VI 回復の段階  
VII 学校復帰の段階    VIII 完全な回復の段階

- ・向き合った手のひら同士を叩くと心地よい音(つまり、拍手する)が出る。それに対して、両手を交差して手の甲どうしで叩くと鈍い音しか鳴らない。つまり、子どもと

関わる大人（保護者、教師）が、向き合っていないと子どもの心の扉は開かないままで、いい音は出ない。いい音が出るためには、何よりも、子どもの気持ちを尊重し、そっと支援の手を差しのべる姿勢、雰囲気、態度が大切である。

#### (4) 不登校支援のキーワード

- ・問題事象に対するキーワードは、「安心感の確立」「表現」「絆の形成」の3つに集約できる。
- ・児童生徒の心の扉をひらくマスターキーは、「ねぎらい」と「いたわり」である。両方の言葉も、「労」という漢字が当てられている。子どもへの「劳い」と「劳り」によって、自分のことを大切に思ってくれている、見捨てられていないという実感と確信を得て、成長エネルギーが高まり、肯定的に自分を受け入れていこうとするのである。
- ・元気な子どもの心の器のなかには、成長（心的）エネルギーがなみなみと注がれており、表情も生き生きしている。体と心に一体感がある状態である。
- ・いじめられている子どもの心の器は、いじめられるつらさからストレスが、子どもが本来もっている成長エネルギーを抑圧し、身体に不調が出てくる。反応として、以下の3つの症状が現れる。①心身症的反応（腹痛・頭痛など）、②神経症的反応（いらいらしたり不安になるなど）、③行動化的反応（キレたり、リストカットを行うなど）
- ・このような時に、いじめられるつらさを身近な大人あるいは友だちに表現（表明）できるかがポイント。それを邪魔するのが心の扉。思春期内閉期には、「どうしたの？」と聞いても、「別に」などと心の扉を開けようとしなくて多く見受けられる。
- ・心の扉を開けるマスターキーとなるのが、相手を“Be-respectful（尊重する）”、つまり自分のことを尊重して関わってくれる人の存在である。日本語にすると、先に示した「ねぎらい（劳い）」、「いたわり（劳り）」の気持ちで関わってくれる人の存在である。その子なりにがんばっていることを認め、言葉に表して伝えることが大切。
- ・人として成長しようとする原動力は、自分は愛され、認められていると実感し確信を得ることから生まれる。

#### (5) 心の扉を開ける3つのプロセス（Moustakas, C. 1996）

ムスターカスは心理療法家（特に、遊戯療法）としての臨床実践から、対人関係において心の扉を開け、心に響く関わりプロセスとして、次の3つのプロセスを提示している。

- ・第1段階 ワンネス（One-ness）響く。相手の身になろうとする「わかろう」とする。ワンダウンポジション、尊重、判断保留（epoche）、ねぎらい。
- ・第2段階 ウィネス（We-ness）支える。相手の役に立つことを一緒に考えようと提案する態度。

- ・第3段階 アイネス (I-ness) 自分の気持ちと自分の考え方を打ち出す。こちら側の伝えるべきことを伝える。

一般的、日常的によくみられるのが、第3段階 (I-ness) →第2段階 (we-ness) →第1段階 (one-ness) と順序が逆になっている。

ムスターカスが提示した3つのプロセスは、カウンセリング的対応と現実原則の提示、すなわち狭義の生徒指導 (指導すべき点はきちんと指導する) を、うまく統合したモデルといってよい。第1・2段階は、カウンセリング的であり、生徒の心をくみ取るところから入り、第3段階では、現実原則の提示を行い、教師の自己開示と教育的指導を行っている段階である。蛇足であるが、我が国の生徒指導は、戦後、アメリカから入ってきた。生徒指導の英語訳は、“School Counseling and Guidance” であるが、英語訳をみると生徒指導の本質が見えてくる。生徒指導には、カウンセリング的視点が求められるといえる。

(6) グッド・シェファード・ルーテル学校(オーストラリア)訪問 (2013) 時の学校長の話

- ・学校では、例えば、算数ができない子には計算の仕方を教え、本読みができない子には、読み方を教えますよね。では、「行動がうまくできない子にはこれまで私たちはどうしてきたのでしょうか」この問いに、校長は、つい最近まで「罰」を与えてきたと話す。しかし現在、オーストラリアの学校では、行動がうまくできない子に学習指導と同じように、まず「よい行いの仕方を教える」という方法をとっているという。具体的には、子ども同士で人を思いやることができる行動の仕方を、全校生で学び、「ピア・サポート」活動として積極的に取り入れており、上級生に、下級生あるいは海外からの転校生への対応を委ねているということである。さらに、当学校に在籍する日本の保護者にインタビューしたところ、ピア・サポートを学校教育に導入しているかどうかを、学校選択の基準にしていることが多いと述べている。

(7) 学校忌避感情からくる不登校の発生機序

- ・学校で嫌なことが起こる→学校へ行きたくないという感情が起こる→嫌なことを解決することができない→行きたくないという感情をうまくコントロールすることができない→周囲が本人の不安や緊張をつかみきれない→本人にとって不快な学校からの逃避→学校へ行けない→不登校が形成される。

(8) ソーシャルボンドとピア・サポート

- ・現代では、子どもを社会集団につなぎとめるソーシャルボンド (社会的紐帯) が希薄化してきている。子ども同士が思いやりのある良質なコミュニケーションの仕方を学び、トレーニングを継続して実際の体験活動を通して、豊かな人間関係を形成するプログラムを如何に提供できるかに関わっている。子ども同士のソーシャルボン

ド（関係の束）を構築し、集団の質を改善して自己肯定感情や学校適応感を高めることが求められる。そのような取組によって、いじめや不登校などの減少につながる。

- ・子どものニーズに応じて大人が集中的に支え、自分でがんばることができる力を育てる。チーム支援（保護者含む）で仲間に助けを求めたり、お互いに支え合ったりする力を育てる。特別活動の時間などを利用して、意志決定や合意形成を図るための話し合いを進め、自分たちの力で乗り越え、共働性意識を高めることが必要。これがピア・サポートの力である。

## (9) 事例

### ①中学校3年生を対象として実施した「学級活動」の実践

実践は、1994年10月下旬から実施された。授業では、2人がペアとなって、あるテーマについて「話す側」と「聞く側」に分かれて実施する授業スタイルで、担任がタイムキーパーとなり、一つのテーマごとに役割交替を繰り返す。テーマを変えて話し合いを進める。

本実践は、特別活動の学級活動の時間に実施した「自分のことを話してみよう」を題材とした授業である。題材のねらいは「自分の進路に対して不安や悩みを抱いている仲間と共感できる場を設定し、受験への不安に伴って生じるプレッシャー、不安感、孤独感を共有し、心の癒しを図る。」である。本学級では、生徒の要望で、3月の卒業までに6回実施した。

本授業のように、友人に話したり、聞いてもらえたりする機会を通して、安心して表現できる喜び、受け止めてもらえる喜び、さらに関係の深まりによって、自己理解と他者理解が深まり、学校生活に活気が生じる機会となってきたことが、生徒の感想から読み取ることができた。1回目の授業感想の一部を紹介する。(原文のまま)「やっぱり、進路についてみんな一人一人、不安やプレッシャーをかかっているんだなあ」「自分のことも聞いてもらえるなんてすごい。安心した」「外見だけで見ていたのと話をした印象ではすごく違いがあった」「こういう風な機会があって、ちょっとだけクラスの仲がふかまった気がする」「この授業をきっかけに仲よくなったのかもしれないし、イイ授業だったと思う」「全然話したことの無い人とも話してみたいと思う」「男の子と女の子のペアとか結構あったけど、その中でペアで仲良さそうに楽しそうに話合っていて、『このクラス良いクラスやな』と思った」

### ②イギリスにおける「サークルタイム」の取組

イギリスの学校（幼稚園を含む）では週に1回、サークルタイムの時間が設けられている。サークルタイムでは、担任の先生とクラスの子どもたちが、全員輪（サークル）になって座り、あるテーマについて、自分の考えを話すことによって「話す力」を、人の話を聞くことによって「聞く力」を身につける活動を中心に進めて

いる。スピーキングオブジェクトとして、マイクにあたるもの（例えば、人形）を一つ準備し、それを受け取った人には、「話す権利」が与えられる。話すことがすぐに思い浮かばない場合は、パスしてあとで話すこともできる。それに対して、何も持っていない他の人は、話をしている人の方に体を向け、「聞く義務」があることが告げられてスタートする。過去にもサークルタイムの授業を参観したが、最近では2019年2月、私がロンドン市内の小学校を訪問した際にも実施されていた。学校教育において、楽しみながら「話す力」「聞く力」を、体験を通して学ぶ機会としてカリキュラムに導入している試みは、子どもの社会性の観点からも人間関係形成能力を高める上でも、大きな教育的意義がある。

#### (10) 講演を振り返って

私は、上記に示した2つの実践事例に、不登校問題を解決するヒントがあると考えている。不登校の子どもたちの存在は、将来の進路に対する不安、学級で生活することに対する息苦しさを感じ始めているサインだと受け止めたい。そのような状況がみられたときに、不登校に陥っている子どもと、学級の子どもをつなぎ止めるソーシャル・ボンドとなる素地をつくるために、人間関係づくりの予防的、開発的視点から、具体的な対応策を検討しておくことが必要であるという点である。不登校の子どもが抱く不安は、どの子どもにも起こっているといってよい。だからこそ、グッド・シェパード・ルーテル学校の校長が話していたように、「クラスのなかで困っている子がいたら、声をかけるなど元気づけたり、不安が解消するまで話を聞いてあげよう」など、「良い行いの仕方」を教え、その具体的方法を学ぶ機会を提供した方が、より生産的である。このときに、不登校経験者や不登校気味の子どもが不登校への対応に参加してくれれば、より具体的なアドバイスをくれるかもしれない。例えば、「声をかけるなど元気づけてあげよう」については、「お節だと思われるかもしれない」とか「そっとしておいた方がいいかもしれない」あるいは、「さりげなく声をかけたほうがいいかもしれない」「そのタイミングは、〇〇のとき」など、いろいろと関わり方のアイデアを出してくれるかもしれない。これは、ピア・サポート活動のプランニング（計画）の段階といえる。ピア・サポートは仲間支援であり、年齢が近いほど、かゆいところに手が届き、その対応も大いに参考になる。このように、不登校生はいつも援助される側にいるのではなく、不登校解決に向けて有効な援助資源をもつ支援者の存在ともなりうる。すると、友だちの役に立っているという自己有用感がかなり増してくるであろう。欧米でかなり導入されているピア・サポート活動においても、ピア・サポーターとなっている学生が、かつて不登校であった生徒や何らかの問題を持つ生徒であったことが、数多く報告されている。